

作文における児童の語彙力・表現力についての実践的研究 —感情表現の指導法の開発と教育実践への具体的提案—

加藤恵梨（愛知教育大学 教育学部 准教授）

1. 研究の目的

本研究は、作文における児童の語彙力・表現力の発達を、感情表現に着目して明らかにし、小学校の「書くこと」の指導に役立てることを目的とする。

2. 調査資料・研究方法

主な調査資料としたのは、愛知教育大学附属岡崎小学校で発行している児童文集『ひばり』（2013 年～2023 年発行の 10 年分）である。それらを悉皆調査することで、1) 児童の語彙・表現の獲得状況の変遷、2) 作文内容と児童の成長との関係を明らかにした。また、1) と 2) をもとに、3) 学年ごとの発達段階に応じた具体的な指導実践を提示した。具体的には、まず、児童詩および作文を対象に感情表現や語彙使用の実態を分析し、次に話の展開、主題の一貫性、文末表現、読書感想文、詩表現といった観点から、児童の成長に伴う作文表現の発達過程を明らかにした。さらに、これらの分析結果を踏まえ、低・中・高学年それぞれの発達段階に即した作文指導の実践について検討した。

3. 研究の成果

分析の結果、児童の作文表現は単なる技能の積み重ねとして発達するのではなく、経験の捉え方や意味づけの変化と密接に関わりながら段階的に深化していく言語活動であることが明らかとなった。低学年では、経験や感情が直接的・感覚的にあらわされ、中学年では経験の整理や構成が試みられるようになる。さらに高学年では、経験を内省的に捉え、自己を言葉によって再構成する表現が見られるようになる。分析結果はそれぞれ独立したものではなく、経験の直接的記述から、整理、主題化、意味づけ、内省へと至る連続的な発達過程を形成している。

4. 教育実践への示唆

こうした発達の特徴を踏まえ、作文指導を「何を書かせ、どのように整えるか」という技能中心の発想ではなく、児童の発達段階に応じて、どのような意識を育てるかという視点から組み立て直した。具体的には、低学年では、気持ちや思いを言葉にする経験を重視し、中学年では、相手や目的を意識して内容を整理・構成する力を育成し、高学年では、表現方法を選択しながら考えを深め、推敲によって表現を磨く指導が有効であることを示した。これらの指導は互いに独立した方法論ではなく、発達に応じて指導の重点を移行させていく連続的な過程として位置づけられる。低学年で育まれる「書くことへの肯定的態度」、中学年で形成される「伝えようとする構成意識」、高学年で深まる「表現を選び、考えを磨く力」は相互に関連している。

5. 本研究の意義

本研究の意義は、児童作文を「上手に書けているか」「型に合っているか」といった評価にとどめるのではなく、作文が児童の成長を映し出す営みであり、同時に成長を支える言語活動であることを実証的に示した点にある。また、分析結果と指導論とを結びつけることで、教育実践に理論的根拠を与え、学齢別に作文指導の構想を示した点にも、本研究の価値が認められる。本研究の新規性は、作文を成果物としてではなく、児童の認識・感情・自己理解の発達過程として捉え、その変化を語彙・構成・指導から統合的に示した点にある。

6. 今後の課題

一方で、本研究には課題も残されている。本研究では小学生を中心に分析を行ったが、今後は中学生以降の作文・詩表現を含めた縦断的調査を行い、発達の連続性をより詳細に検討する必要がある。また、扱った作文の種類や題材には一定の偏りがあり、他の作文形式や評価場面との関連についても、今後の検討課題としたい。